【行革甲子園2014】

取組市町名	伊方町	所属	産業振興課

▽取組事例名	ボランティア組織と連携した特産品開発	▽取組期間	平成23年度～ （継続中）

▽取組概要

東日本大震災の被災地支援を目的としたボランティア団体（名称：ガラン山義捐いもプロジェクト）や地元中学校、県及び町職員他地元有志（以下、ボランティア団体等という。）と連携し、利用率の低迷していた町有の農作業体験施設を活用して、特産品であるサツマイモのブランド化に向けた事業を展開した。

▽取組みの背景

町独自の特産品開発の必要性が求められる中、そのひとつであるサツマイモのブランド化において、そのストーリーの構築、加工品の開発、消費者ニーズの把握等が課題となっていた。さらに、サツマイモ栽培農家から、サツマイモの品質低下や減収への対策としてウイルスフリー苗供給の要望があがっていたが、これらの課題に対応するための試験、実証園が必要となっていた。

▽取組みの狙い・具体的内容

農業体験施設の園地のより効果的な活用を目指して、無償でボランティア団体へ貸与することとした。同時に、ブランド化への必須条件の一つであるストーリーづくりを目的に「なぜ、当地のサツマイモが美味いか？」を解明するための試験栽培や農家の要望に応えるウイルスフリー苗の試験栽培に取り組み、データを蓄積した。

また、サツマイモの栽培管理においては、労働力確保のため、ボランティア団体等と連携して行った。これによって収穫したサツマイモは、焼き芋などの加工品を含めボランティア団体等により東北へ支援として送付するとともに、一部は、その送料や栽培にかかる苗・資材費等に充てるために販売された。その際に消費者の嗜好調査を同時に行った。加えて、規格外品等については、町により加工品開発の原料として活用する他イノシシ捕獲のための飼料として、地元猟友会へ無償で提供された。

平成２３年度　　栽培面積　約１７ａ　　収穫量　約３，４００ｋｇ
平成２４年度　　栽培面積　約１０ａ　　収穫量　約２，０００ｋｇ
平成２５年度　　栽培面積　約２０ａ　　収穫量　約３，３００ｋｇ

▽取組みを進めていくなかでの課題・問題点（苦労した点）

町担当職員と主たるボランティア組織のメンバーというマンパワーの不足とサツマイモ栽培にかかる専門知識の不足。ボランティア意識の広がり。

☆工夫した点

町としての経費負担は、老朽化した機器等の修復（具体的には、農耕機器や猪対策用電気柵の修理）程度にとどめ、その他栽培にかかる経費の内、サツマイモ苗、肥料、農薬等の資材の購入費及び燃料費については、ボランティア団体により、収穫したサツマイモを販売し確保した。

特に収穫時に不足するマンパワーを補うため、東北支援を目的として活動する地元中学校や県及び町職員他地元有志と連携して活動した。

栽培環境の調査においては、町内施設の他、町外（内子町五十崎、大洲市肱川）の施設の協力を得て実施できた。

ウイルスフリー苗の試験栽培においては、鉢上げした幼苗のその後の増殖、栽培において、農家と協力して実施した。

▽取組みの効果

・農作業体験施設の園地の有効活用と周辺部の管理が効率的に実施できた。
・サツマイモの特産品化における加工品の開発、消費者の嗜好調査、ストーリー構築に寄与する栽培環境調査が効率的に実施できた。
・ボランティア団体等との連携により、その活動が支援でき、当該組織の育成につながった。また、各組織や町としても、震災支援活動を通じて、被災地とのつながりを持つことができた。

▽住民（職員）の反応・評価

・特に、農家からウイルスフリー苗の栽培試験に対する評価が高く、事業継続の強い要望があり、新年度も継続している。
・地元中学校による被災地中学校との交流の継続を支援することにより、学校教育の面でも貢献できた。

☆取組み効果を踏まえたフォローアップ

地元の現状を十分に把握した上で、消費者の目線に立った特産品開発を進めていく必要がある。また、いくつかの目的や成果を求めて協力体制を維持し、拡張していく必要がある。

☆将来的な構想のほか、他団体へのアドバイス

何か新しいことや今までやってなかったことを発想するために、常にアンテナをのばし、情報に敏感であるべきと考えている。加えて、その発想を実現するためには、現実を直視し、能力を分析して、身の丈にあった取組を心がける必要があると思われる。また、地域づくりにおいて、行政として地域の個性ある活動を支援するために、自らが汗を流して行動し、ともに汗を流す人の輪を転げていくことが重要と考える。